

二〇一三年度

# 全統高2記述模試問題

## 国語

二〇一三年一月実施

(一〇〇分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

### 注 意 事 項

- 一、問題冊子は21ページである。
- 二、解答用紙は別冊になっている。「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば、試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、下段の所定欄に **氏名**、**在学高校名**、**クラス名**、**出席番号**、**受験番号**（**受験票の発行を受けている場合のみ**）を明確に記入すること。なお、氏名には必ずフリガナも記入のこと。
- 五、解答には、必ず黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定欄に記入すること。
- 六、指定の解答欄外へは記入しないこと。採点されない場合があります。
- 七、試験終了の合図で右記四、の事項を再度確認し、試験監督者の指示に従って解答用紙を提出すること。

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

【一】 次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

美のカノン（絶対的基準）が力関係のなかでつくりあげられてきた社会装置であることを、見失ってはならないであろう。新時代の美の判断は、多様化の方向へ向かうかわりに、むしろユニフォーム化の方向へすすむ確率のほうがはるかに高いように思えて仕方がない。巨大なメディア装置を備えたボーダーレス社会の出現は、文明間での弱肉強食の状況をつつそう推し進めることになるのではないか。われわれが美とか醜とかの社会的な作用についてよほど意識的な目をもちつづけてゆかないかぎり、美に関する価値判断の多様性は、かろうじて残っているかすかな地域差さえもそぎとられ、いつそう単純で、いつそう強圧的な相貌をもつ「普遍的な美の基準」のもとにまとめあげられてしまう可能性のほうが、ずっと高いのではないだろうか。

その結果として、「だれもが自分のあるがままの肉体に合う衣服を着るようになる」（デュ・ロゼル）ではなくて、自分の好きな衣服を着られるようにするために自分の身体のほうを修正する努力を行なっているのが、多くの女性の現実ではないのか。既存の社会システムがあまりにも強くて壊せないと感じいたときには、システムのなかでそれを自分一個のために実践的に利用して、お金を稼ぎ楽しく生活することを選ぶほうが、賢いのではないか。こうして

X

は、いつまでもその力を失うことなく存続するのである。

身体造形をあたかも悪いことであるかのようにいつてしまったが、そんなつもりはない。そもそも人類が「あるがままの肉体」を受け入れてきたことなどほんとうにあったのかといえ、それは、<sup>（注）</sup>ノンなのである。

そもそもわれわれはみずからの身体をどのような基準に基づいて意識化してきたのであろうか。そのもつとも古い方法が、身体造形という行為ではなかったか。

身体を特定のカノンにしたがつて造形しようという欲求は、なぜ裸体<sup>a</sup>をキヒするののかという羞恥心の問題と分かちがた

く結びついていた。両者の起源を探ると、文明社会の原理が、まわりを取り巻いていた自然とのあいだに区別を設けることで成り立っていたことが分かってくる。その根底には、人間の自然にたいする恐怖心が横たわっていたといえる。

言い方を換えれば、文明化とは、自然との境界を明確にする行為なのである。すなわち、未知なるものを既知のものに変え、外部にあつたものを手なづけ自己の領域に招き入れることで、恐怖の源を取り除くことであつた。しかし困つたことに、自然はかならずしも人間存在の外側に存在しているものではなかつた。自然は人間存在の内部そのものにも陣取つていた、というか人間存在の容器そのものが自然の領域に属していたからである。いうまでもなく人間の身体は、生身のままでは自然の領域に属している。古代人にとって、これはなんとも厄介な問題であつたにちがいない。

そこで、われわれの祖先は、どうしたのか。身体に人工的な工夫を加えたのである。身体を覆う、絵を描く、さらにはキズを加える、あるいは、特定の部位を強調する。いずれも身体とのあいだに心理的な距離をつくる工夫を行なつたのである。<sup>1</sup>こうして身体を外在化させたうえで、内部に取り込んだのである。

文明化行為としての身体造形の習慣は、自我の形成および自我の社会化の過程と並行関係にあつた。それはまた、個人が単独で担う行為ではなかつた。共同体が、共同体の存続のために行なう行為として、集団で引き受け儀式化してきたのである。

身体造形の試みは、しばしば痛みをとまなう。かならずしもその必要はないのでは、と文明慣れしたわれわれは考えてしまふのであるが、フランス・ボレルが『衣服と肉体』のなかで強調するように、痛みは肉体の組織化（私的、公的、個人的、社会的な組織化）の過程で重要な役割を担っている。痛みがともなうからこそ付加価値が発生するのである。というのも、文明世界では自然の限界をどれくらい超えているかが、存在や行為の価値を構成する基準となっているからである。そして、まさしくこの苦痛こそが、われわれ人間のもつ

Y

という本質的な二つの観念を結びつ

このことは、フェティシズム（偶物崇拜、拝物愛）を考えてみれば、ナットク<sup>b</sup>がゆく。フェティシズムは、しばしば「倒錯」の一語で片づけられる傾向があるが、それはきわめて一面的な見方でしかない。フェティシズムは、人間が本来的にもつ「シンボル化能力」に基づく点で、あらゆる文明に通底する本質的な現象なのである。身体をのっぺらぼうのまにしておくのではなく、区分けし部分化することを通して、ある地点に欲望を凝縮させてゆく。そのとき、その身体は、人の視線に耐えられる身体、美しい身体となる。纏足<sup>てんそく</sup>、癍痕<sup>はんこん</sup>、コルセット……。現代人のエステ、ダイエットもまた、この系列に属する営為なのである。

最近では、苦痛の大小以外にもさまざまな基準ができた。苦痛は必ずしも肉体を通したものでなくともようになった。また、苦痛に類似したダイエット<sup>c</sup>手段であつてもよくなった。お金であつても、またもつと精神的な努力というものであつてもよい。「わたしはこれだけ痩せました」、というように他人には真似のできないたいへんな努力の跡を示すかたちで差をつける。もつとも、その逆、努力しているのに努力の跡を見せない、というかたちでの差のつけ方もある。いずれにせよ、困難が大きければ大きいだけ、キショウ<sup>d</sup>性が高いだけ、価値が上がる、そういう図式は変わっていない。だから苦痛や困難の大きさを競うという、一見理解しがたい競争行為も生まれたのである。

ところで、個の運命が共同体の運命に重なり従属していた時代には、身体は「自然と文明」という図式のなかでとらえられていたが、いまはちがう。現代社会においては、自立をめざす個にとって重要なことは、他者との関係性を構築することである。しかも有利な条件での関係性の構築こそが求められている。自分をいかに美しく見せるか、美しく見ってもらうか。これが身体造形のもつとも強力な動機である。身体への関心は、自分が気持ちよくなるため他人のためではない、などという人がけっこういる。そう思うのは勝手だが、そういう人々は、社会の目を見たくないだけなのではないか<sup>2</sup>。

じつさい、現代社会においては、肉体のイメージの改変を求める欲求は、強まるいっぽうなのである。胸、腹、まぶ

た、鼻、唇、耳。最近は歯の矯正も注目されている。大きすぎる乳房の縮小手術も盛んだ。オンケンな方式にはちがいないがフィットネスやエステも、さらには男のボディビルディングだって、同じ目的をもったものであろう。身体造形にたいするタブーは、もはやなくなったかのようである。

「多様で、個性的な美しさ」という表現が標語のようになりかえされるが、そうした美がほんとうにあるのかといえば、わたしはおおいに疑問を禁じ得ない。

たしかに美の基準は、時間軸上で変化してきた。しかし、その都度、「美しい人」と「美しくない人」とのあいだには、厳然として区分があった。区分の基準は、あなたやわたしの頭のなかに存在しているのである。「個性的な美しさ」という言い方は、あたかも社会的な選別の手段として「美しさ」というものがないかのような言い方、はつきりいつて見て見ぬふりをする言い方なのである。じっさいはみんなの頭のなかに「美しさA」「美しさB」「美しさC」というものがあり、厳然とランクづけされている。そういうランクづけによってしか「美しさ」というものは可能にならない。「AもBもCもみんな等価な美しさ」という世の中にわれわれは耐えられるかといえば、まことにあやしい。

ところが、いまは民主主義社会である。いくら市場の論理だといっても、そういうふうにはホンネはいえない。だから「それぞれが多様性のある美しさをもっている」などという。だがじっさいには、自分独自の個性的なにかをやっても社会的な価値としては認められない。逆に、社会的に認知されたモデルに自分を近づけるかたちでしか、個性を出すことができない。たとえ人々の多様性、個別性に訴えたとしても、美の基準が、非常に序列化されている。だから、結局は同じようなモデル構成を現出させてしまう。そこがまさしく近代社会の不思議なのである。

（北山晴一『衣服は肉体になにを与えたか——現代モードの社会学』）

（注）ノン……non（仏語）。否、いいえ。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

X

Y

選び、記号で答えよ。

に入れるのに最も適当な語句を、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ

X

ア 美の多様性  
イ 美しさの神話  
ウ 個性的な美  
エ 肉体美の称揚  
オ 美の歴史性

Y

ア 自然と文明  
イ 身体と精神  
ウ 意識と無意識  
エ 美と欲望  
オ 愛と不安

問三 傍線部 1 「こうして身体を外在化させたうえで、内部に取り込んだ」とはどういうことか。八十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「そういう人々は、社会の目を見たくないだけなのではないか」とはどういうことか。百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 画一化する衣服に合わせて自分の身体を修正することは、他者と同質化するという身体造形の本質を想起させる。

イ 身体に人工的に手を加えて変形させることは、野蛮であるどころか、文明というものの本質に位置する営みである。

ウ 肉体の改変を望む心性の裏には、つねに自然に対する恐怖感と、そこからの脱却を願うという動機が隠れている。

エ 肉体のイメージを改変したいという現代に特有の願望は、市場の論理とともにグローバル化しつつある。

オ かつての共同体は、成員の身体造形に関わることで、個人の内面にまで共同体の秩序を浸透させていった。

カ 自分の肉体に即した服装を誰もが求めはじめたことが、近代において美の基準を普遍化させることにつながった。



二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

いまから百年ほど前までは、「本などなんの役にも立たない」というのは社会の常識、それも健全な常識であった。

私の家は代々、横浜の外れで酒屋を営む商人であったが、「商人に学問はいらない」が家訓であり、大正三（一九一四）年生まれのお父も中学校に入れてもらえなかった。本を読んでいたりと祖父に殴られたという。下層中産階級では本はおろか学問でさえ厄介物扱いされていたのだ。

子供はすべからず親の職業を継ぐべしという社会通念がまかりとおり、あらかじめ定められた階級を離脱することなど考えられなかった時代には、この「健全な常識」が社会を支配していたのだ。

ではいつたい、いつごろからこの「健全な常識」が崩れ、<sup>1</sup>「本を読むことはよいことだ」という「新しい常識」が社会に誕生したのだろうか？

学歴を身につけたことで階級離脱の可能性を得た都市中産階級の成立以後だろう。

この新しい階層の特徴は均質性にあった。親の年収、親の学歴、家庭環境などみなよく似ていた。この均質性をもった集団が旧制中学、旧制高校、旧制大学と学歴の駒を進めると、ただ勉強ができるとか成績がよいなどということだけでは集団の中で差異を示すことができなくなる。集団の中で一目おかれるようになる（私の用語でいえば「ドード」）。まいったか、おれはすごいだろう」というドード競争に勝つ）には、勉強や成績以外のところで差異を示すことができなければならない。

ここにおいて、いわゆる、<sup>(注1)</sup>デカンショ（デカルト、カント、ショーペンハウエル）の大正教養主義が成立したのである。

つまり、学歴の獲得や就職といった直接的な功利目的には役に立たないが、しかし、均質集団の中でのドード競争には



有効な武器となりうるものとして読書は登場したのである。デカンショの片言半句を自在に引用できることはドーダには役だったのである。この点を忘れてはならない。社会学的に読書はかならずしも「純なるもの」ではないのである。

だが、

X

はいくらでも起こる。旧制高校のデカンショ・ドーダはその当初の目的がなくなり、直

接的な功利性が失われたあとも読書を経験した元旧制高校生になんらかの影響を及ぼしたのである。そう。それはなんらかのときか言いようなない漠然とした微弱な影響であつたかもしれない。だが、影響であつたことはたしかなのである。なぜなら、社会に出たあと、彼らは異口同音に旧制高校時代の読書が今日の自分を築いてくれたと感謝することはあつても、無駄なことをしたと後悔することは少なかつたからだ。この事実から推測できるのは、読書には速効性の効能はないが、遅効性のサプリメント的な効能はありそうだということだ。そして、実際、この考えは、やがて広く受け入れられていった。大正教養主義の勝利である。大正教養主義の洗礼を受けた人々は自分たちの子供にも絵本や児童文学を買い与え、文学全集が出れば予約購読を申し込んだ。

だが、その覇権は長くは続かなかつた。

富裕の民主化が進み、大正教養主義を担ったのよりも少し下の階層、さきほど私が「健全な常識」と呼んだ通念が支配的だった下層中産階級が中等教育や高等教育にアクセスするようになると、学生たちにも、読書で得た教養を武器にドーダをするようなまだるっこい競争を続けていく余裕がなくなつてきたのだ。同じドーダでももっと単純で分かりやすいドーダでなければ面倒くさいと感じる人たちが増えてくるのである。

たとえばファッション、たとえばスポーツやレジャー、たとえば時計や自動車といったモノ。要するに、高等教育にアクセスする階層のドーダ・アイテムが変わつたのだ。

そしてこの現象は戦前の昭和十年代と戦後の昭和四十年代に二度起こっている。

このうち、後者は私自身が体験したからよくわかる。明らかにドーダ・アイテムの交代、というよりも同時併存が観察

されたのだ。片方に旧制高校生的な教養ドーダ、読書ドーダをする学生がいるかと思えば、もう片方にはそうした旧来的ドーダにはまったく反応を示さず、ファッション、車、スポーツのことしか頭にない学生もいた。またその両方という学生さえ存在していた。

私はというと、この第三のタイプの学生で学生運動にシンパシーを感じたり、万巻の書を読んでやろうというフアウス<sup>(注2)</sup>ト的情熱に駆られる一方、ファッションや車にも心ひかれていたのだ。

おそらくこうした中間的ポジションは酒屋の息子という出身階層と昭和四十年代に思春期を送ったという時代環境がたぶんに関係している。家庭のメンタリティーとしては、高学歴を得るのはいいが、読書などという役に立たないことはすべきではないという「健全なる常識」の中で育った関係で、読書や教養といったものに対する信仰が薄い。しかし、反面、神奈川県のエリート高校（当時）から東大に進学したことで教養ドーダ、読書ドーダの洗礼を受けている。ひとこと言えば、階層的にも時代的にも過渡期的、中間的存在であつたわけだが、このポジションのおかげで、読書というものの本質に敏感であることができたのだ。

すなわち、片方では読書は現実生活でなんの役にも立たないと考える人たちの主張を率直に認めることができる。なぜなら、読書などしなくてもたくましく生きていける人々をたくさん知っているからだ。彼らは彼らなりに充実した人生を全うしている。私ももし出身階層を離脱することがなかったら、彼らと同じように読書などせずに無事に一生を終えていたはずである。だから

Y

。

だが、その一方で、青春時代に読書をする習慣を身につけたことが自分の人生にとって計り知れない効能をもたらしたとはつきりと認めることができる。読書なしの人生と読書ありの人生のどちらを選ぶかと問われたら、躊躇することなく後者を選ぶと答えるだろう。

つまり、ここまでの人生を振り返って総括すると、読書は少なくとも私には役に立ったということができるのだが、問題

は実はこの結論の出し方自体にあるといえる。

なんのことかといえば、読書の効能とは「今になって振り返ってみれば」というかたちで「事後的」にしか確認できないことにある。言い換えると、事後的であるから、これから人生を始めようとする若者に向かって「読書するとこれこれの得があるから読書したほうがいいよ」と事前的にはいえないということだ。

ところで、事後的には効能は明らかだが、事前的には効能を明示できないものというのは、読書に限らず、たくさんある。

教育などというものはその典型である。就職や結婚に有利といった実利的目的を除いて教育はなんの役に立つのかと考えると、これもまた「受けないよりも受けた方がよかった」と事後的にしか効能を答えられない。恋愛もまたしかり。しないよりもしたほうがいいのだ。

では、事後的には効能は明らかだが事前的には効能を明示できないものを若い人たちにどのように勧めたらいいいのか？ 読書しかないというのが私の結論である。

そうなのである。読書こそは「大切なものはみな事後的である」という矛盾を克服できる唯一の方法なのである。なぜなら、本というのは多かれ少なかれ、この事後性を自覚した人によって書かれているからだ。そのため、読書をすることによって、本来は事後的にしか知り得ないことを事前的に知ることができる。ただし、読書のこの最大の効能は事後的にしか知ることができないという矛盾にさらされているのである。

というわけで、私の最終的な結論は次のようなことになる。

読書の効能が事後的である以上、それを事前的に説明することはやめて、<sup>3</sup>「理由は聞かずにとにかく読書しろ」と強制的・制度的に読書に導くこと、これしかないのである。

（鹿島茂「理由は聞くな、本を読め」）

(注) 1 デカンショ (デカルト、カント、ショーペンハウエル)……当時よく読まれた三人の哲学者の名前をもとに作られた言葉。

2 ファウスト……ドイツの作家ゲーテ (一七四九―一八三二) の代表作である同名戯曲の主人公。悪魔メフィストと出会い、あ

の世での魂の服従と引き換えに、現世で人生のあらゆる快楽・悲哀を体験する契約を交わす。

問一 空欄

X	・	Y
---	---	---

に入れるのに最も適当な語句を、次の各群のA～オの中からそれぞれ一つずつ

選び、記号で答えよ。

X

- A 社会が批判しても個人としてはやりたいといったこと  
I 手段でしかなかったことが後で目的になるといったこと  
ウ 動機は不純でも結果が不純ではなくなるといったこと  
エ 偶然でしかないと考えたことが実は必然だったといったこと  
オ 学問的には容認できずとも世間では是認されるといったこと

Y

- A 読書しない人々に向かって読書の効能を説いても無駄なことは自明なのだ  
イ 読書などしないで済めばそれに越したことはないことはわかり切っているのだ  
ウ 読書しない人々をひそかにばかにしてしまう自分をいつも戒めているのだ  
エ 読書がよい効能をもたらすなどと私は今まで露ほども思ったことはないのだ  
オ 読書したくてもできなかった下層の人々にいつも後ろめたさを感じるのだ

問二 傍線部1「『本を読むことはよいことだ』という『新しい常識』が社会に誕生した」とあるが、どのような経緯でそうなったのか。百二十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問三 傍線部2「階層的にも時代的にも過渡期的、中間的存在であった」とあるが、このような「私」の説明として不適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 社会的成功を直接には導かないような営みに意味を見いだすのは愚かだという雰囲気の中で育った。

イ 教養を身につけるために他のことを顧みず読書にいそしむという態度に徹することはできずにいた。

ウ 読書や教養といったものを絶対化することはないが、それらの効能を無視することもできない。

エ 読書一辺倒に生きるむなしさは理解しているが、自分の人生において読書は不可欠であったと考えている。

オ 実生活において読書は必要ではないという人々の考え方は、けっして誤っているわけではないと判断している。

問四 傍線部3「『理由は聞かずにとにかく読書しろ』と筆者が言うのはなぜか。八十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 本文の内容と合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 大正教養主義の全盛期には自在に引用できるほどに熟読されたデカンショその他の哲学書は、高等教育が担う意味合いの変化に伴い教養の証とは見なされなくなっていた。

イ ドーダ・アイテムの変化が戦前の昭和十年代にも戦後の昭和四十年代にも起こったように、競争の道具と見なされる事物は時代の流れに沿って変化する傾向がある。

ウ かつては読書によって社会的地位を得ようとする野心に満ちた学生も少なくなかったが、そうした姿勢は当時支配的だった世襲という社会通念との対決を強いられることを意味していた。

エ 本を読むことには相応の意義があり、推奨されるべきものだとする考え方は、つい百年前にはじめてあらわれたように見えるが、じつは長い歴史を通して潜在していたものである。

オ 大正教養主義の隆盛期には児童書や文学全集を競って子どもに買い与える動きも見られたが、そうしたドーダ競争の迂遠さゆえに、それは一過性の流行に終わった。

国語の問題は次の頁へ続く。



三 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

中頃、山に<sup>(注1)</sup>、平等供奉<sup>(注2)</sup>と言うて、やむごとなき人ありけり。すなはち天台、真言の祖師<sup>(注3)</sup>なり。

ある時、隠れ所<sup>(注4)</sup>にありけるが、にはかにつゆの無常を悟る心起つて、「何として、かくはかなき世に、名利<sup>(注5)</sup>にのみほだされて、厭ふべき身を惜しみつつ、むなしく明かし暮らすところぞ」と思ふに、過ぎに<sup>1</sup> **X** 方もくやくしく、年ごろのすみかもうとましくおぼえければ、さらに立ち帰るべき心地せず。白衣<sup>(注6)</sup>にて足駄<sup>(注7)</sup>さし履<sup>(注8)</sup>きをりけるままに、衣などだに着ず、いづちともなく出でて、西の坂を下りて、京の方へ下りぬ。いづくに行き止まるべしともおぼえざりければ、行かるるに任せて、淀<sup>(注9)</sup>の方へまどひありき、下り船のありけるに乘らんとす。顔なんども世の常ならず、あやしとてうけひかねども、**A** 見ければ、乗せつ。「さても、いかなる事によりて、いづくへおはする人ぞ」と問へば、「さらに何事と思ひわきたる事もなし。さして行き着く所もなし。ただ、いづ方なりとも、おはせん方へまからんと思ふ」と言へば、「いと心得ぬ事のさまかな」とかたむきあひたれど、さすがに情なくはあらざりければ、おのづから、この船の便りに、伊予<sup>(注10)</sup>の国に至りにけり。さて、かの国にいつともなく迷ひありきて、乞食<sup>(注11)</sup>をして日を送りければ、国の者ども、「門乞食<sup>(注12)</sup>」とぞ付たりける。

山の坊には、「**B** て出で給ひぬる後、久しくなりぬるこそあやしう」なんと言へど、かくとはいかだか思ひ寄らん。「おのづからゆゑこそあら<sup>2</sup> **Y**」なんと言ふほどに、日も暮れ、夜も明けぬ。驚きて尋ね求むれど、さらになし。言ひ甲斐なくして、ひとへに亡き人になしつつ、泣く泣く後のわがを営みあへりける。

かかる間に、この国の守なりける人、供奉の弟子に浄真阿闍梨<sup>(注13)</sup>と言ふ人を、年ごろあひ親しみて祈りなんどせさせければ、国へ下るとて、「はるかなるほどに頼もしからむ」と言ひて具して下りにけり。

この門乞食、かくとも知らで、館の内へ入りにけり。物を乞ふ間に、童部ども、いくらともなく尻に立ちて笑ひのしる。こゝら集まれ<sup>4</sup> **Z** 国の者ども、「異様のものの様かな。まかり出でよ」とはしたなくさいなむを、この阿闍梨、あはれみて、物など取らせむとて、ま近く呼ぶ。恐れ恐れ縁のきはへ来りたるを見れば、人の形にもあらず、やせおとろへ、物のはらはらとある綴ばかり着て、まことにあやしげなり。さすがに見しやうにおぼゆるを、よくよく思ひ出づれば、我が師なりけり。あはれに悲しくて、簾の内よりまろび出でて縁の上に引きのぼす。守より始めてありとあらゆる人、驚きあやしむあまり、泣く泣く様々に語らへど、言葉少なにて、しひて暇を乞ひて去りにけり。

言ふはかりもなく、麻の衣やうの物用意して、ある所を尋ねけるに、ふつとえ尋ねあはず。はてには国の者どもに仰せて山林至らぬくまなく踏み求めけれども、会はで、そのままに跡を暗うして、つひに行く末も知らずなりにけり。

その後、はるかに程経て、人も通はぬ深山の奥の清水のある所に、「死人のある」と山人の語りけるに、あやしくおぼえて尋ね行きて見れば、この法師、西に向かひて合掌して居たりけり。いとあはれに尊くおぼえて、阿闍梨、泣く泣くとかくの事もしける。

（『発心集』による）

（注） 1 山……比叡山延暦寺。

2 供奉……宮中の内道場に仕えた高僧。

3 祖師……ここでは高僧のこと。

4 隠れ所……便所。

5 名利……名声と利益。

6 伊予の国……現在の愛媛県。

7 乞食……経文を唱えて家々を回り、食物や金銭を受けながら修行すること。

8 綴……布を継ぎ合わせた粗末な衣服。

問一 空欄 X には助動詞「き」、空欄 Y には助動詞「む」、空欄 Z には助動詞「り」を、それぞれ適切な形に活用させて記せ。

問二 空欄 A ・ B に入れるのに最も適当なものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア あだに      イ あらはに      ウ あてやかに      エ あながちに      オ あやにくに      カ あからさまに

問三 傍線部1「さらに立ち帰るべき心地せず」と平等供奉が感じたのはなぜか、説明せよ。

問四 傍線部2「後のわざ」・4「こころ」の意味を、それぞれ漢字二字で記せ。

問五 傍線部3「かく」はどういうことを指しているか、二十五字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 傍線部5「あはれに悲しくて」と浄真阿闍梨が感じたのはなぜか、三十五字以内（句読点等を含む）説明せよ。

問七 傍線部6「いとあはれに尊くおぼえて」は、どのようなことについていっているのか、十五字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問八 問題文が収められている『発心集』は、鴨長明が編纂した説話集である。同じ作者の手になるこれ以外の作品名を一つ、漢字で記せ。

#### 四

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点 四十点)

璉<sup>a</sup>字用章、祥符<sup>ノ</sup>人。成化十一年進士<sup>ナリ</sup>。初<sup>メ</sup>授<sup>ケ</sup>丹徒知県<sup>ヲ</sup>。会<sup>タ</sup>中  
使<sup>ユ</sup>如<sup>レ</sup>浙<sup>ニ</sup>、所<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>縛<sup>リ</sup>守<sup>ニ</sup>・令<sup>ヲ</sup>置<sup>キ</sup>舟中<sup>ニ</sup>、得<sup>テ</sup>賂<sup>ヲ</sup>始<sup>メ</sup>積<sup>ス</sup>①。将<sup>シ</sup>至<sup>ル</sup>丹徒。璉<sup>ニ</sup>選<sup>ビ</sup>善<sup>ク</sup>泅<sup>グ</sup>  
水者二人<sup>ヲ</sup>、令<sup>ム</sup>下<sup>ニ</sup>著<sup>キ</sup>耆<sup>ラウノ</sup>老衣冠<sup>ヲ</sup>先<sup>ニ</sup>馳<sup>ハセテ</sup>以<sup>テ</sup>迎<sup>ヘ</sup>上<sup>ニ</sup>。中使怒<sup>リテ</sup>曰<sup>ク</sup>、「令<sup>クニ</sup>安<sup>カル</sup>在<sup>ル</sup>。汝  
敢<sup>ヘテ</sup>来<sup>リテ</sup>謁<sup>セン</sup>我<sup>ニ</sup>耶<sup>ト</sup>。」令<sup>ム</sup>左右執<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。二人即躍<sup>リ</sup>入<sup>リ</sup>江中<sup>ニ</sup>、潜<sup>リテ</sup>遁<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup>。璉徐<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>  
給<sup>アギ</sup>曰<sup>ク</sup>、「聞<sup>ク</sup>公驅<sup>リテ</sup>二人<sup>ヲ</sup>溺<sup>ニ</sup>死<sup>セシムト</sup>。」江中<sup>ニ</sup>。方今聖明之世、法令森嚴<sup>ナリ</sup>  
如<sup>ニ</sup>人命<sup>ヲ</sup>何<sup>セント</sup>⑤。中使懼<sup>オソレ</sup>、礼謝<sup>モテシテ</sup>而去<sup>ル</sup>②。

(『中州人物考』による)

(注) ○璉——人名。楊璉。祥符県出身。

○成化——明代の年号。

○進士——科挙の合格者。

○丹徒知県——丹徒県の長官。

○中使——朝廷から地方の視察に派遣された宦官<sup>かんがん</sup>。

○浙——浙江地方。長江の下流域。

○守・令——「守」は州の長官。「令」は県の長官。

○耆老——土地の長老。

○方今——今・現在。

○聖明之世——聡明な皇帝の治世。

○森厳——厳しい。

問一 傍線部 a 「字」、b 「徐」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

問二 傍線部 ①「釈」・②「謝」と同じ意味で「釈」・「謝」が使われている熟語を、それぞれ後のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

① 「釈」

ア 釈明      イ 釈放      ウ 会釈      エ 解釈      オ 希釈

② 「謝」

ア 感謝      イ 代謝      ウ 謝絶      エ 謝礼      オ 謝罪

問三 傍線部 1 「将至丹徒」、4 「令左右執之」を書き下し文に改めよ。但し「執」は「とらふ」（終止形）と読む。

問四 傍線部 2 「璡選善涸水者二人」とあるが、楊璡が二人に与えた任務を六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部3「令安在」を現代語訳せよ。

問六 傍線部5「中使懼」とあるが、中使はどういうことを恐れたのか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 二人の部下を殺されて逆上している楊璉なら、何をしでかすかわからず、皇帝の後ろ盾がある自分さえも殺しかねないということ。

イ 行く先々の土地で賄賂を要求してきた楊璉なら、二人を殺した自分に対して、なおさら莫大な賄賂を要求するだろうということ。

ウ 自分は二人を溺死させてなどいないのに、楊璉はそう信じ込んで、本気で自分を殺人の罪で皇帝に訴え出るかもしれないということ。

エ 自分が二人を溺死させてしまったことを、楊璉が皇帝に訴え出ると、自分が各地でしてきた悪事も暴かれるかもしれないということ。

オ 自分が行く先々の土地で賄賂を要求してきたことを、楊璉は探り出して、自分を脅そうとしているのではないということ。





